

掛幅縁起絵における物語と絵画

—京都国立博物館蔵「温泉寺縁起絵」を中心に—

東京大学史料編纂所助教 藤原 重雄

はじめに

全体テーマの「文学と美術」を「物語と絵画」に読み替え、具体的な造形作品に即してお話したい。

対象とするのは、中世日本の〈掛幅縁起絵〉と括られる作品群である。〈掛幅縁起絵・伝記絵〉といっても耳慣れず、学界内でも明確な術語ではないが、どのような作品を指すか共通諒解は得られやすい。定義風に述べると、日本に実在する寺社の草創やその靈驗譚、あるいは祖師高僧の伝記といった宗教的な物語を、しばしば連幅のセットとなる大画面に描いた絵画作品のジャンルである。「聖徳太子絵伝」「法然上人絵伝」「親鸞聖人絵伝」といった作品をどこかでご覧になったことがあるだろう。1300年前後の時代は、「一遍聖絵」(1299年)と「春日権現験記絵」(1309年発願)という大部の絵巻物、あるいは京博蔵「高野山水屏風」や春日社を始めとする宮曼荼羅といった、日本に存在する／した土地や人物を描く、絹本著色の優れた作品が生みだされた。時代の精粹が集中する分野といえる。〈掛幅縁起絵〉は、主題や技法の面でこれらと密接な関係にある作品グループである(が、教科書・概説書にほとんど載らない)。特に美術的に傑出する京博寄託「誓願寺縁起絵」と奈良博寄託「家原寺縁起絵(行基菩薩行状絵伝)」が双璧をなし、現在六幅からなる「志度寺縁起絵」もユニークで魅力に尽きない。「聖徳太子絵伝」以下の伝記絵が量産されるのに対し、特定の寺社に関わる縁起絵は一点限りのものが多く、個性に富んでいる。京博寄託の作品では「観興寺縁起絵」「玉垂宮縁起絵」「清園寺縁起絵」などがあり、かつて有馬温泉に伝わって、現在は所蔵となっている「温泉寺縁起絵」もその一つである。

1、「温泉寺縁起絵」の基本データ

絹本著色、一幅、縦 189.6×横 153.5cm、室町時代・15世紀

伝来:(摂津国有馬)温泉寺→三井寺勸学院→(三井)小関明神→(宇治平等院)最勝院→京博

関連史料:『臥雲日件録』宝徳四年(1452)四月十八日条

「從此往温泉寺、聞律院僧読本寺記、凡湯客出百銭、則院僧出読之、今日同来僧、為予弁読賃、記三卷、皆係以絵事、就中一卷、専録尊恵事迹、語似恵自記、蓋平

家演史所載、本於此記乎、聞記見絵畢、」

※「絵解き」:歴史的には、絵の解説全般ではなく、芸能的なものとして、限定された意味で捉える必要あり。

参考文献:梅津次郎「有馬温泉寺絵縁起に就いて」(『絵巻物叢考』中央公論美術出版、1968年。初出『大和文華』17、1950年)

藤原「温泉寺縁起絵」(『国華』1338、2007年)、「有馬温泉寺の縁起絵をめぐって―掛幅本と絵巻―」(日本温泉文化研究会編『温泉の文化誌 論集 温泉学①』岩田書院、2007年)

2、「温泉寺縁起絵」に描かれた物語

[Ⅰ]行基による寺院(温泉寺/昆陽寺)建立説話

有馬温泉に向かう途中の行基は、出会った病者の求めに応じて魚を調理して与える。さらに病んだ肌を舐ると、薬師如来の姿を顕わして、温泉の行者だと告げる。

[Ⅱ]地主神となる女体権現の説話

女体権現は三輪明神と夫婦であったが、その浮気に怒って山中から追い出す。

[Ⅲ]尊恵の閻魔庁訪問譚(如法堂縁起)

清澄寺の慈心房尊恵は、閻魔王の招きにより、十万人持経者による法華経転読に参加して、如法経を持ち帰り、有馬温泉に如法堂を建立して納める。

3、物語テキストからはみ出す部分

絵巻では、詞と絵とが交互に組み合わされていることで、絵と詞との相互関係を分析する軸(どう対応しているか、どこがずれているか)を立てやすい。対して掛幅縁起絵の場合、全体がひとつの面をなし、物語テキストそれ自体は作品の外側にあり、画面全体をどのように構成するかという点に、絵巻形態ではさほど顕在化しない問題がみえてくる。

掛幅の場合、画面が大きな平面となることで、空間性をより備えてくる。一画面内には地理があり、それは実際の景観や観念的な空間感覚と密接な関係を持っている。そして掛幅画は、荘厳具として空間を生みだしたり、立体的な空間を現出する／幻視する作用も備えている。物語にもとづく絵画は、テキストとなった物語を描き語るのみならず、言語とも異なった独自の方法で造形としてなしている「語り」があり、歴史的な史料としても解釈することができる。絵画は、新たな物語を引き寄せ、紡ぎ出す契機ともなる。掛幅縁起絵には、絵画と物語の融合した幸福な関係が顕著に顕れ出ている。そして「絵の居場所」における物語の復権を、現代の学問なりに探って行きたい。